

農作物の残留農薬など近年問題となつていますが、綾町では昭和48年からこの取組みが始められたのですが、当時は、安全性をとるか生産性をとるかといったようになり議論を呼んだとのこと。しかし、当時の町長は町民の医療費が年々大きくなつてきたことなどを、町民の健康保持のために「食の安全を優先して取組まなくてはならない」と強く訴え、一坪菜園の普及と野菜種子の配布を始め、制度への理解を得るよう努められました。自然生態系の基本となる土づくりなどに取組む、農作物の生産性が通常の8割ほどに落ち込むなど、様々な苦労があったが、それらを取り組んでいく取組開始から15年目の昭和63年に条例の制定に至つたとのこと。近年、その取組みが認められ農林水産大臣表彰や数々の賞を受賞、そして有機JAS登録認定機関に町が認定され、綾町の有機農産物は全国に販路が拡大され販売されるようになっていきました。一般的に有機栽培は、個々の農家やグループなどでは取組みやすいですが、町を挙げて取組まれたことは大変評価できると考えます。制度定着までの苦労が、現在消費者に信頼され愛される綾町農業を確立したと言えるでしょう。



（綾手づくり本物センター）

《ついでに》「野尻町マンゴ部会」視察

◆農家の高齢化などの問題により、野尻町の特産品であるメロンから確実に需要の拡大が期待できる作物への転換への要望が強くあり、平成11年春、西諸県で初めて野尻町で2戸の農家と1法人の合わせて4020平方メートルの試験的栽培を

【マンゴー栽培ハウスにて】



（熟して落下したものが完熟マンゴーと呼ばれます。写真左マンゴーは赤く熟し、落下しても傷が付かないようにネットが掛けられています。）

始めたとのこと。平成12年夏、マンゴー生産のめどが立ったと判断され、町の振興品目として、同年秋、J.A.こばやし氏が「野尻町マンゴ部会」を発足させました。栽培は年々拡大され、平成19年には70195平方メートルまでになっています。栽培農家255戸の内20戸がメロン生産農家です。施設園芸についての知識や能力は高いのですが、マンゴー栽培は未だ馴染みが薄く、生産技術や販売面に関する不安感が大きいため、生産者普及センター、J.A.役場が一体となって定例会や圃場巡回、先進地研修などの活動を通して品質や生産向上に動いているそうです。それらの活動が実を結び、販売面で県の「新みやざきブランド」認証を第一次で受け、16年産では出荷量44.4トン、販売高は1億円を突破、18年産は気象の影響で66トンと伸び悩んだが、販売価格は2億円を突破したそうです。

メロン生産農家のマンゴー栽培への取組みは、当初全く未知への挑戦であったようです。果実の焼けなどの発生を克服しながら研鑽を重ね、短年でブランド化まで上り詰めたことに敬意を表したいと思います。栽培農家の方に、直接お話を伺つたのですが、全国から注文が殺到しているとのことでした。宮崎の完熟マンゴーは熟して自然落下したもののしか太陽の卵とは言えないことから、注文した方から「まだ出荷できないのか」などと苦情がくるなど対応に苦慮していると笑顔で応えていました。また、全国に認知されてから注文が殺到し、生産者からの御価格は変わっていないのに小売価格が高騰して困っているとも言っていました。山形の特産品も強力にアピールしていかなくてはならないと感じました。

始めたとのこと。平成12年夏、マンゴー生産のめどが立ったと判断され、町の振興品目として、同年秋、J.A.こばやし氏が「野尻町マンゴ部会」を発足させました。栽培は年々拡大され、平成19年には70195平方メートルまでになっています。栽培農家255戸の内20戸がメロン生産農家です。施設園芸についての知識や能力は高いのですが、マンゴー栽培は未だ馴染みが薄く、生産技術や販売面に関する不安感が大きいため、生産者普及センター、J.A.役場が一体となって定例会や圃場巡回、先進地研修などの活動を通して品質や生産向上に動いているそうです。それらの活動が実を結び、販売面で県の「新みやざきブランド」認証を第一次で受け、16年産では出荷量44.4トン、販売高は1億円を突破、18年産は気象の影響で66トンと伸び悩んだが、販売価格は2億円を突破したそうです。

《木脇産業(株)視察》

◆現在、地球規模で環境問題がクローズアップされています。地球温暖化防止の国際枠組みである京都議定書でもその重要性が認識されています。京都議定書目標達成計画（平成17年4月閣議決定）では、平成20年から24年の我が国における二酸化炭素排出量を、平成2年の排出量に比べて、平均で6%削減するとの目標を掲げ、このうち、3.9%を国内森林の二酸化炭素吸収量で確保しようとしています。しかし、現在の林業の生産活動は停滞しており、間伐、保育等の施業や伐採後に植林が行われない森林がみられます。安価な輸入材が多く使用されていますが、日本で育つ木材を使用し森を育て豊かにするために、地域の



【しっかり試食させていただきました(^_^)v】



【マンゴー栽培について勉強中】

杉材を使い地球を守る森林の育成と木材利用のサイクルに積極的に取り組んでいる企業を視察させていただきました。

山形県でも「やまがた緑環境税」が本年度より施行されます。放置された森林を整備することは、環境に対しても有効ですが災害防止などにも大きな役割を果たします。日本産の木材を使用しながら植林をし、きちんと整備していくサイクルは早急に確立していかなければならないと思います。私たちが一人ひとりがもっと真剣に環境と向き合っていかなければならないのではないのでしょうか。



【何処の売店にも東国原知事が・・・】



【木材加工工場での説明を受ける】

《編集後記》
何処の売店へ行っても、ほとんどの商品に、東国原宮崎県知事のキャラクターがプリントされています。トコトン徹底しています。わたしは山形県産品のPR手法を新たに模索するなど上手にやりながら、販路の拡大をしていかなければならないと改めて感じました。